

## 埼玉県秩父市での疥癬が疑われるテンの確認例

藤田宏之（川の博物館）

### はじめに

疥癬はヒゼンダニによる寄生が原因で、ヒト、愛玩動物、家畜、野生動物などで発症する皮膚疾患である。山本ほか（1998）では1920年代をはじめに古くから知られているヒトや家畜、および愛玩動物の国内外の感染事例に関連する文献が挙げられている。また、野生動物での疥癬の感染事例はやや遅れて、1950年代以降国外のアカギツネなどが文献上で挙げられている。国内では鈴木ほか（1981）による岐阜県のタヌキ感染事例や北海道知床半島のキタキツネへの蔓延（塚田ほか、1999）が挙げられるが、Takahashi et. al（2001）ではタヌキの疾病がヒゼンダニによって引き起こされていることが証明されている。

国内では野生のタヌキの感染事例が近年相次いでいるが、隣県の詳細な報告例として、群馬県富岡市・甘楽地方の山本ほか（1998）、横浜市の木戸（2014）、東京都練馬区の白井（2018）、東京都南多摩地域の佐々木・大澤（2022）などが挙げられる。タヌキでは著しい脱毛をきたし、衰弱して死に至らしめる例が近年増えていることや（高田ほか、2019）、感染個体は見た目にも大変痛ましい姿でもあり、行政による疥癬蔓延の注意喚起チラシも大分市や熊本市などに見られる。これらから疥癬は全国各地に感染が広がっていると推測される。

埼玉県内では川の博物館でも敷地内で疥癬感染が疑われるタヌキが確認され（藤田・石井、2012）、また、筆者は埼玉県東松山市葛袋や同県大里郡寄居町赤浜で感染が疑われるタヌキを目視確認しているなど（藤田、未発表）、埼玉県北部でも疥癬が蔓延していることが考えられる。しかし、タヌキ以外の食肉目の疥癬感染事例の報告は少なく、埼玉県内ならびに隣県では群馬県でのハクビシンでの感染事例が挙げられる程度である（姉崎ほか、2010）。

筆者は埼玉県秩父市でこれまでに疥癬の感染事例報告のない、イタチ科のテン（ホンドテン）*Martes melampus melampus* において、感染が疑われる個体を確認した。

### 衰弱したテンの確認事例

筆者は2016年2月29日埼玉県秩父市浦山（図1）において、夜間自動車で浦山川左岸沿いの道路を走行中、車道に出て南方向から北方向にかけて徘徊していたテン成獣1個体を目視確認した。自動車を停止させ、前照灯を点灯したまま様子をうかがったが、動きが緩慢で衰弱しているよううかがえた。同個体はすぐにその場から逃げることはなく、写真を撮影することができた（図2）。

また、同個体は首から右前肢にかけて、ならびに腰回りから右後肢や尾は脱毛がひどく、疥癬に感染している疑いが高いと考えられた。

### 考 察

疥癬の原因となるヒゼンダニは、皮下に食い込んで寄生するだけでなく、個体サイズが0.5mm以下と微小なため外見目視による確認は困難である。しかし、著しい脱毛など外見上での目視確認が容易である。また、これまでに北海道のキタキツネにはじまり、近年はタヌキの事例報告が相次いでいることなどから、獣医師などの専門家だけが知り得る疾病ではない。さらに、筆者が近年目視確認したタヌキの事例は、寄居町赤浜で脱毛が進行し感染の疑いがある幼獣2頭が車道に出没したが、人目につきやすい午前中の明るい時間帯であった。

しかし、これまでにテンは疥癬に関する報告は見られない。例えばタヌキは生息する個体数が多いだけでなく、複数頭で行動することやヒトの生活環境の近い地域で活動していることから、目にする機会も他種に比べると多いと考えられる。それに対してテンは、庭木のカキなどの果樹を餌とするなど、人為的な環境も利用するが、樹上でも行動することや、きわめて神経質な動物であることから（細田・鏞、1996）、人目につきにくい。そもそも生息する個体の総数もタヌキより少ないと考えられるため、感染した個体を目にするのは難しいと考える。

本稿は単なる目撃例に過ぎないが、細かい



図1 テンが確認された地点（電子国土 Web を使用）



図2 疥癬の感染が疑われるテン

知見の積み重ねは大切なことと考える。また、疥癬は多種多様な哺乳類に感染例があり、蔓延は多方面への影響が考えられる。ヒトとの関係が深い家畜やペットへももちろんだが、野生種での蔓延は、哺乳類のみならず生態系への影響も心配される。国内各地で猛威を振るっている特定外来種アライグマの感染例もあり（佐鹿ほか2009）、今後も注視していきたい。

### 謝 辞

高橋守博士にはダニ類についての知見、文献資料のご提供をいただき厚く御礼申し上げます。

### 引用文献

姉崎智子・坂庭浩之・田中義朗・黒川奈緒子（2010）群馬県のハクビシンの疥癬について。群馬県立自然史博物館研究報告14：141-144。  
藤田宏之・石井克彦（2012）埼玉県立川の博物館周辺の哺乳類相。埼玉県立川の博物館紀要

12：1-4。  
細田徹治・鏞雅哉（1996）テンとエゾクロテン。日本動物大百科1 哺乳類 I。平凡社、東京、pp136-139。  
木戸伸英（2014）ヒゼンダニ (*Sarcoptes scabiei*) に感染した野生ホンダヌキ (*Nyctereutes procyonoides*) の疫学調査、血清生化学的性状および治療法に関する研究。北海道大学博士論文（獣医学）乙第6930号。  
佐々木翔哉・大澤剛士（2022）東京都南多摩における疥癬症に感染したタヌキの活動時間。保全生態学研究27：275-281。  
佐鹿万里子・森田達志・的場洋平・岡本 実・谷山弘行・猪熊 壽・浅川満彦（2009）野生アライグマ *Procyon lotor* にみられた疥癬の1例。日本野生動物医学会14(2)：125-128。  
白井亮久（2018）武蔵学園構内に確認された疥癬タヌキと2017~2018年のタヌキの生息状況。武蔵高等学校中学校紀要3：81-94。  
鈴木義孝・杉浦誠・金子清俊（1981）岐阜県下の野生タヌキにおける疥癬症の蔓延について。岐阜大農研報45：151-156。  
Takahashi, M., Nogami, S., Misumi, H., Maruyama, S., Shiibashi, T., Yamamoto, Y. and Sakai, T. (2001) Mange caused by *Sarcoptes scabiei* (Acari: Sarcoptidae) in wild raccoon dogs, *Nyctereutes procyonoides*, in Kanagawa prefecture, Japan. *Journal of Veterinary Medical Science*, 63, 457-460。  
高田信弘（編著）・高橋守・藤田博己・夏秋優（2019）医ダニ学図鑑。北隆館、東京。  
塚田英晴・岡田秀明・山中正実・野中成晃・奥祐三郎（1999）知床半島のキタキツネにおける疥癬の発生と個体数の減少について。哺乳類科学39(2) 247-256。  
山本貞司・高橋守・野上貞雄（1998）群馬県富岡・甘楽地方の野生のタヌキにみられた疥癬について。 *Medical Entomology and Zoology*, 49(3)：217-222。